

田平町文化財調査報告書第4集

笠松天神社古墳

1989

長崎県田平町教育委員会

田平町文化財調査報告書第4集

笠松天神社古墳

—北松浦郡田平町所在の前方後円墳—

1989

長崎県田平町教育委員会

発刊にあたって

かねてからの懸案でありました、笠松天神社古墳の発掘調査が、このたび県文化課の格別のお取計らいで調査できましたことは、大変よろこばしいことであります。

この古墳が、本県においても数少ない貴重なものといわれており、今回の調査で遺物や副葬品等から構築の時代は勿論、その時代のいろいろの状況が確認され、私達の先祖の生活を知ることが出来るものと大きな期待をもっていたのですが、既に盗掘を受け、それ等の確認ができなかつたことは、誠に残念であります。しかしながら、当町にあります未調査の岳崎古墳と共に、稀少な存在であることには変わりが無いと思われます。

本古墳は、前方後円墳としてはきわめて形が整っており、学習教材としての利用価値も高いものと思われます。里田原遺跡・支石墓・田平町立歴史民俗資料館等一円の地域にありますので、今後史跡の見学地として大いに期待されるのであります。

最後に今回の発掘調査にあたり、御尽力をいただいた長崎県教育庁文化課の方々に衷心から感謝を申し上げますとともに、本調査に積極的な御理解と御協力をいただきました、笠松天神社総代の方々並びに氏子の皆様方、そして本調査の作業に御協力いただきました地元の皆様方に対し、深甚の感謝を申し上げまして調査報告書発刊のことばといたします。

昭和63年12月

田平町教育委員会

教育長 松 田 正 幸

例　　言

1. 本書は、昭和63年度の国庫補助を受けて実施した、長崎県北松浦郡田平町所在の、笠松天神社古墳発掘調査結果について報告するものである。
2. 本古墳は、従来、笠松神社古墳としてきたが、笠松天神社が正式の名称なので、今後「笠松天神社古墳」に統一する。
3. 調査は田平町教育委員会を主体とし、長崎県文化課が協力して実施した。
4. 本書の執筆は、Iの後半を石井が、III-(3)「土層」の項を村川が、その他は藤田が分担して行った。
5. 本書に関係する写真的撮影は藤田が行った。
6. 本追跡の調査に関する造物・図面・写真などは、長崎県文化課が保管の任に当っている。
7. 本追跡の調査関係者は以下のとおりである。

田平町教育委員会　教育長　松田　正幸

社会教育主事　石井　哲

笠松天神社総代　山崎　文夫(代表)　金丸　康彦

藤沢　弘　有浦　幸八　南　実

長崎県文化課　主任文化財保護主事　藤田　和裕

文化財保護主事　村川　逸朗

8. 本書の編集は藤田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	
(1) 地理的環境	3
(2) 周辺の遺跡	3
III 調査	
(1) 調査の概要	7
(2) 墳丘	7
(3) 土層	10
(4) 埋葬主体部	12
(5) 出土遺物	13
IV まとめ	14
—付	15

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	4
第2表 長崎県の前方後円墳	17

挿図目次

第1図 笠松天神社古墳位置図	1
第2図 田平町位置図	2
第3図 周辺の地形と遺跡分布図	5
第4図 笠松天神社古墳と周辺状況図	8
第5図 墳丘実測図	9
第6図 土層実測図	11
第7図 埋葬主体部実測図	12
第8図 出土土器実測図	13
第9図 長崎県の前方後円墳	16

図版目次

図版 1	笠松天神社古墳遠景	21
図版 2	笠松天神社古墳近景	22
図版 3	調査風景	23
図版 4	調査風景	24
図版 5	墳丘の状況（土層の状況）	25
図版 6	墳丘の状況（土層と板石検出状況）	26
図版 7	墳丘の状況（賽石の検出状況）	27
図版 8	埋葬主体部の状況	28
図版 9	墳丘と埋葬施設	29
図版 10	出土遺物	30

I 調査に至る経緯

笠松天神社古墳の発見は、昭和50年12月のことである。昭和47年度から続けられていた里田原遺跡の調査のあいまを見て、周辺の遺跡の分布の状況などを調べていたが、里田原遺跡の縄文・弥生時代に続く古墳時代の遺跡が知られていないのが疑問であった。昭和50年12月、里田原遺跡南側の丘陵の状況の確認に向ったが、その結果、笠松天神社の境内に古墳らしいものがあることがわかった。最初は単なる盛土のようにも見えたが、低くて小さな、前方部と考えられるものが伸びていたため、前方後円墳に間違いないとの結論に達した。しかし、里山原遺跡の調査中でもあり、測量するまでには至らず、昭和51年3月になってやっと図化することができた。この時は、墳丘の形と規模を確認するため50cmの等高線を入れ、幅部と考えられる線をおさえておくにとどまっていた。この結果は、長崎県埋蔵文化財調査報告書第25集（1976年）のなかに、おおまか以下のように報告しておいた。

「墳丘は、N-47°Wの、ほぼ北西・南東に主軸を取り、現存長31m、後円部直径20mを計るが、前方部が小道で切られているため、築造時より短くなっていることが考えられる。後円部の高さは約2.5mであるが、墳頂部が平らで、直径に対しての高さが足りないようと思われる。埴輪、葺石などの墳丘の外部施設は知られておらず、樹木も認められない。前方部の幅が後円部にくらべて狭く、また低いこと、さらに、南側断部が中途から外に張りだすように観察されることから、前方後円墳でも古式のものに属するもののように思える。」

当時は、墳丘もふくめて周辺は植林されてすぐであり、樹木の高さも低く、古墳の墳丘らしく見えていたが、その後この古墳は、杉や檜の林の中に隠れるような状況になってしまった。

昭和56年度から始めた、長崎県の遺跡周知事業の一環として、市町村の分布調査を行い、田平町は昭和58年度に実施した。その際、本古墳も田平町内の47箇所の遺跡の一つとして登録された。

さらに、昭和62年度には、県内



第1図 笠松天神社古墳位置図

の「重要遺跡基本資料」として、町内の「日ノ岳遺跡」「里田原遺跡」「岳崎古墳」「つぐめのはな遺跡」とともにあげられ、遺跡の保護及び周知徹底に努めるための資料とされることとなった。

町としては、長崎県内においては、数が非常に少ない前方後円墳であると考えられるため、この古墳の内容・規模等を確認するために、昭和63年度の田舎補助事業として、発掘調査を実施することとした。

また、この古墳のある一帯は笠松天神社所有のものであり、発掘調査実施にあたっては、氏子の皆さん方の承諾が必要なため、4月2日に氏子総代（5名）の内諾を得、さらに同月12日に氏子による臨時総会で発掘調査の承諾を得た。

今回の調査は、田平町教育委員会がその主体となり、発掘調査の実施にあたっては長崎県文化課が行うこととし、9月26日から10月8日までの13日間で実施するに至った。



第2図 田平町位置図

II 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

笠松天神社古墳は、長崎県北松浦郡田平町小手田免517-1の、笠松天神社の境内にある。

田平町は、九州本土部の北西隅から、さらに北西に伸びた、北松浦半島の先端部にあたる位置にある。東は松浦市、南は江迎町、鹿町町に接し、西側は平戸瀬戸をはさんで平戸島に面している。また、北方も海で鷹山大島や馬渡島、さらに、岩崎水道のかなたには岩崎の島が望まれる。中世には、松浦衆と呼ばれる人々が、この近辺一帯を舞台にして活躍し、それに伴う城跡などの遺跡も残されている。

昭和61年10月1日現在での田平町は、土地面積35.01km²、人口は8,680人である。北松浦郡12町1村のうちでは、土地面積は第1位、人口は第3位となっている。

北松浦半島をほぼ南北に走る国見山系は、その南東部の多良山系とともに、長崎・佐賀の県境となっているが、国見山系の東側、佐賀県側は有田川に沿った断層によって急激な段差を生じている。一方、国見山・八天岳などの山稜西側は、低平な台状火山の地形面となっている。この、北松玄武岩と呼ばれる荔盤層が、多くの河川によって開拓された台地上に、集落が散村状に分布しているものも、この一帯の特徴といえよう。

田平町内を通るMR（松浦鉄道）は、「日本本土最西端の駅」といわれる平戸口駅付近で急な転回をしつつ、佐世保・伊万里方面を結んでいる。この平戸口駅から松浦方面へ、約500mほどのところから見えはじめめる盆地一帯が里田原遺跡で、約40ヘクタールほどある。現在の水田面より下に、まだ多くの遺構や、木器を含むかなりの量の遺物が残っているものと考えられる。また、地表には西北九州には割りあい知られている、支石墓も残る。笠松天神社古墳は、この里田原遺跡のすぐ南側の台地上に立地している。

笠松天神社古墳に至るには、MR（松浦鉄道）を利用すれば平戸口駅で下車、南東方向へ徒歩で約20分ほどである。特急バス利用の場合は、平戸口桟橋のバスターミナルで下車し、同じく徒歩で30分弱の場所にある。

(2) 周辺の遺跡

田平町には、昭和63年12月現在で47箇所の遺跡が知られている。これらは、昭和58年度に実施した遺跡調査事業に伴う分布調査の結果であるが、なかには、工事に伴って判明したものもある。先土器時代に關係する遺跡は17箇所で、縄文時代の遺跡は29箇所、弥生・古墳・中世の遺跡はいずれも4箇所ずつになっていて、圧倒的に先土器時代・縄文時代の遺跡が多いが、こ

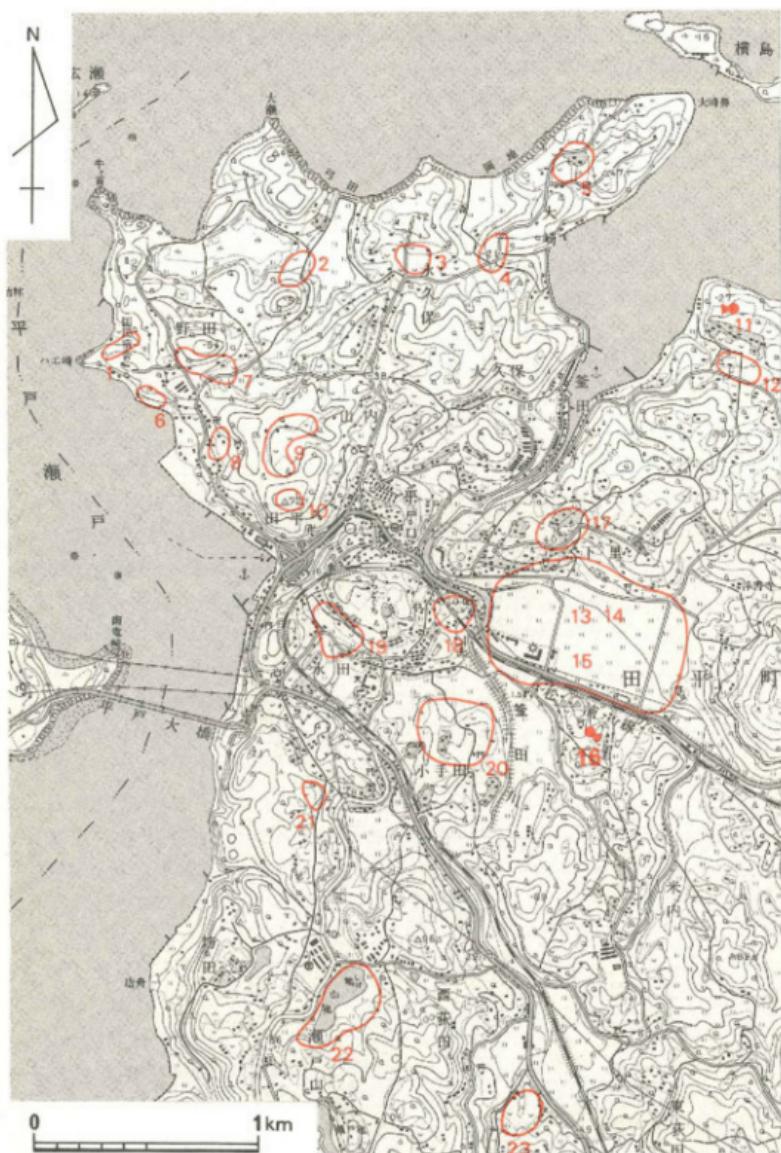
の状況は北松浦郡の他の市町村とも似たような傾向を示している。これに比べ弥生時代以降の遺跡が少ないが、可耕地への集中など、質的な面なども考えられることである。

それぞれの遺跡については、第3図と表1表を参照してもらうこととし、ここでは大まかに各時代別の遺跡のあり方について述べておくこととする。

まず、先土器時代の遺跡について見ると、第1表2の、日ノ岳遺跡以下、繩文時代のものと複合するものも含せて17箇所が知られている。しかし、発掘調査がなされ、性格等について判明しているのは日ノ岳遺跡のみであり、他は遺物が表面採集されたという地点である。日ノ岳遺跡が位置する標高5~12mという高さを除けば、その他の遺跡は、標高50m前後から100mを超える付近までの高さに位置している。このような遺跡のあり方については、地下水脈の湧水点との関係を指摘する見解もある。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	名 称	所 在 地	種 別	立 地	時 代
1	ハエ崎 遺跡	野田免字ハエ崎	遺物包含地	丘陵	繩文
2	日ノ岳 遺跡	大久保免字大池	々	々	先土器
3	中瀬 遺跡	大久保免ヤブ田・中瀬	散布地	々	々
4	永久保 遺跡	大久保免字永久保	々	台地	繩文
5	大崎みやま 遺跡	大久保免字田ノ頭・みやま	々	丘陵	先・繩
6	つぐめの墓 遺跡	野田免字ハエ崎	遺物包含地	海岸・丘陵	繩文
7	野田 遺跡	野田免字上野田	散布地	台地	先・繩
8	前目 遺跡	山内免字前目	々	々	繩文
9	猿新田 遺跡	山内免字猿新田	々	々	先・繩
10	陣笠城跡	日の浦免字城山	城跡	山頂	中世
11	岳崎古墳	岳崎免字桜岡代	前方後円墳	台地	古墳
12	岳崎 遺跡	岳崎免字岳崎	散布地	丘陵	繩文
13	里田原 遺跡	里免	遺物包含地	盆地	繩~奈
14	里田原条里跡	里免	条里遺構	平地	奈良
15	里田原支石墓	里免	墳墓	々	繩・弥
16	笠松天神社古墳	小手山免字米ノ内	前方後円墳	丘陵	古墳
17	里城跡	里免字城	城跡	々	中世
18	籠手田城跡	山内免字片宗・城山	々	々	々
19	永山 遺跡	山内免字馬場崎	散布地	丘陵	繩文
20	小手山 遺跡	小手山免字椿崎	々	台地	々
21	坊田 遺跡	小手山免字坊田	々	丘陵	先・繩
22	鳴山池 遺跡	小手山免字鳴山池	々	台地	繩・弥
23	中野ノ辻 遺跡	荻田免字中野ノ辻	墳墓	々	弥生



次に縄文時代の遺跡であるが、他の時代と複合しているとはいって、田平町内47箇所の遺跡のうち29箇所を占め、全体の6割を超えていた。なかでも6^{註1}、つぐめのはな遺跡など良好な遺跡も知られている。この遺跡は、昭和46年9月に調査され、縄文前期から中期にかけての遺物が出土した。この遺跡の特徴は、眼前の平戸瀬戸の魚類・大形の海獣類を漁獲の対象としたことを示す大形の石鋸・石匙などとともに、鱗骨などが多數出土している点である。これによく似た性格の遺跡として、本図中には含まれていないが、昭和59年5月、里山原遺跡の調査中に見つかった、田平町北海岸の久吹浜遺跡、また西海岸に位置する以善ヶ浦遺跡などが知られている。そして、縄文時代晩期になると、生活圏が内陸部地の方にも移動したものと考えられ、その一部が里田原遺跡^{註4・5}での発見へとつながっているものと思われる。

弥生時代の遺跡は、町内で4箇所が知られているが、13・15は里田原遺跡内の包蔵地と支石墓であり、場所としては3箇所となる。22は、鳴山池遺跡で、縄文時代の遺物と混在しての散布地として知られている。23の中野ノ辻遺跡^{註6}は、台地上に立地する石棺墓群である。昭和55年と56年に調査があって、14基の箱式石棺が検出され、弥生から古墳時代にかけての墓地であろうとされている。里田原遺跡の南方2kmほどの場所にあり、篠田川流域の小盆地を生活の場としていた人々の墓地と考えられる。

古墳時代の遺跡は、從前はよく知られていなかったが、当笠松天神社古墳が見つかったあと、11の岳崎古墳の発見があった。また、久吹浜遺跡や里田原遺跡からは須恵器^{註7}が出土し、里田原遺跡の一部からは土師器が出土していて、まだ明らかにはなっていないが、周辺には古墳時代後期の遺跡の残っている可能性は強いものと考えられる。古墳時代の遺跡については、付記として本報告書の末尾に加えておいたので、参照されたい。

奈良時代以降の遺跡としては、里山原の表面に地割りとして残る条里遺構のほかは、中世の遺跡に移り、10の陣笠城跡^{註8}・17の里城跡・18の籠手田城跡などが知られているに過ぎない。

- 註1) 『日ノ岳遺跡』長崎県立美術博物館 1981年
- 2) 『中野ノ辻遺跡 里田原遺跡』田平町教育委員会 1982年
- 3) 『つぐめのはな遺跡緊急調査概要』長崎県文化課 1971年
- 4) 『里田原遺跡』長崎県教育委員会 1975年
- 5) 『里田原遺跡』田平町教育委員会 1985年
- 6) 註2に同じ
- 7) 註5に同じ
- 8) 『長崎県遺跡地図』長崎県教育委員会 1987年

本項は、昭和58年度に実施した長崎県遺跡周知事業の一環としての、埋蔵文化財分布調査の結果を利用した。

III 調査

(1) 調査の概要

調査は、笠松大神社の秋の祭礼が終ったあとで実施することとし、そろそろ秋の気配が濃くなり始めた、9月26日（月曜日）から作業を行うことにした。

墳丘の立木の伐採は、町教委の方で午前中から進められており、午後もその作業を続けてもらった。昭和50年には、人の背丈ほどでしかなかった木もかなり大きくなってしまい、大きいものでは目通20cmに近いものもあって、伐採・枝打ち・片付けは予想以上に手間だった。同時に墳丘上に基準杭を設定した。後円部中心と前方部中心を結ぶ基準線、それに直交して後円部を四分割する線を設定し、調査を実施するための杭を打っておいた。また、これらの作業と並行して、墳丘と、その周辺の地形測量を1/200で実施した。

9月27日午後、後円部に調査塗を設定して調査にかかり、表土剥ぎを開始した。後円部を70cm～80cmほど掘り下げたところ、扁平な板石が出土しあじめ、これらの板石が後円部中心付近に集中している状況を確認した。一方、墳丘の構築時における規模・構築状況の確認などのため、主軸に直交するトレンチを後円部から裾の外側に設定して掘り下げ、全面に入頭大前後の礫で葺いた状態が認められた。また、この葺石の端は後円部の裾と考えていた部分までにとどまり、後円部の規模を明確にすることができた。埋葬主体部があったと考えられる板石の集中する部分は、その周辺部を含めて土がやわく、かつて掘られたことがあることを示していた。

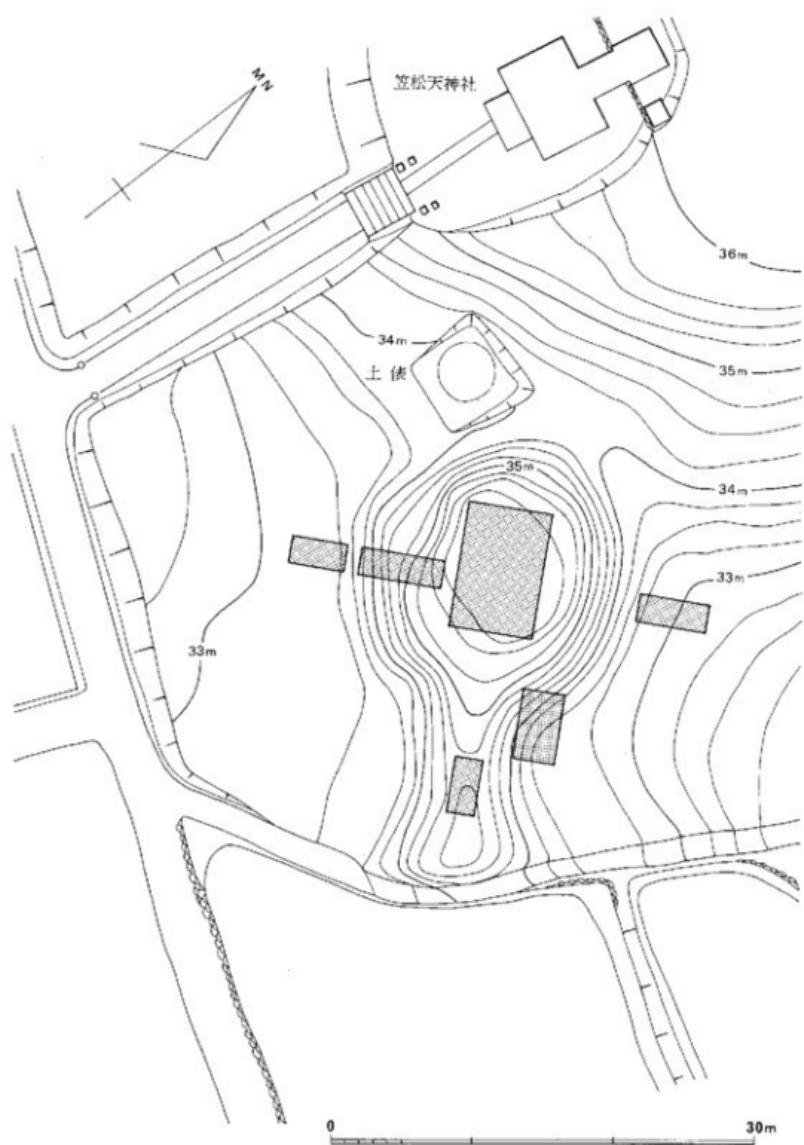
板石の集中する状況の写真撮影と実測を終えたあと、板石を取り外して部分的に掘り下げた結果、その下部には遺構が残っていないことが判明した。

前方部と後円部の、「くびれ」の部分にも3m×5mの試掘塗を設定して掘り始め、表土のすぐ下方から、やや小さめの葺石と、その裾の部分での端部を確認した。

前方部のなかほどに、厚さ5cmほどの板石が二枚、主軸に直交するような状況で見えていたので、その部分の確認のためにも掘り下げを行った。しかし、それは単に板石を立てた、というのみで、現地表面下40cmほどで地山に達し、その意図するところについては不明であった。以上の調査を終え、すべてを埋め戻したのが10月8日で、その日の午後現場を引きあげた。

(2) 墳丘

昭和50年の発見当時は、植林されてまだ開がなく、草は茂っていたが、古墳とその周辺は明るく開けていた。今回の調査にかかる前は、樹木が伸びてかなり暗く、うっそうとした感じで、外から見ても古墳の存在がわかりにくい状況であった。そのため、今回の調査では、古墳の墳丘に限らず、その周辺の樹木も伐採することで同意をいただいた。

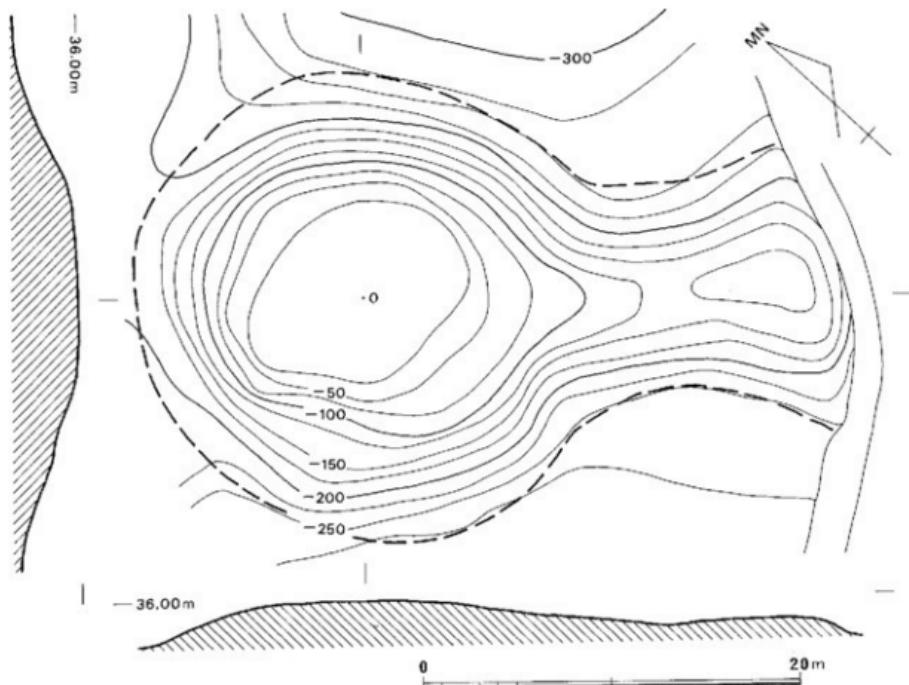


第4図 笠松天神社古墳と周辺状況図

以前からこの古墳は、古墳としてではないが、この場所に高まりがあるということでは知られていた。付近の人や、今回の作業に来ていた氏子の人々の記憶では、戦後のことであるが、笠松天神社の祭りで、奉納の行事を催す際、古墳の高まりがじゃまなため、削ろうとの意見があったが、タブの大木があって処分のめどが付かず断念し、その後、この古墳には手を触れた事はないとのことである。出土品についての記憶は、誰に聞いても残っていなかった。

今回の調査で判明した、墳丘についての状況は以下のとおりである。

本古墳は、最少の場合を想定しても、全長34m、あるいはそれ以上の長さを持ち、後円部の直径22m、高さは2.5mを測る。前方部は、現存する部分での最大幅14m、高さ約1.4mである。「くびれ」部分での幅は9.6mある。古墳の基底面の高さがほぼ同じであることから、高くなっている北側から伸びた丘陵の、ゆるい斜面を整形してから築造したと考えられる。前方部・後円部、ともに墳丘は段を持った造りではなく、墳丘の表面には、拳大から人頭大の礫石による葺石が認められた。この葺石は、墳丘斜面の全面に施されていたものと考えられ、後円部の平坦面・前方部の上面には認められず、周濠も最初からなかったものと考えられる。



(3) 土層

今回の発掘調査の目的は、B-1～4区で内部（堆積）主体の確認をすることと、A-2区、C-1区で古墳の埴丘の葺石の確認と、埴丘の回りの周濠を発見することにあった。土層をみていく中でそれらのことともみていきたい。

A-2区西壁、北壁

- 1層………表土、暗褐色土層。
- 2層………暗茶褐色土層（色調は、表土とあまり変わらない。充填土は硬く、粘性はないのでバサバサしている。1～3層への漸移層としてとらえていいかもしれない）。
- 3層………赤茶褐色粘質土層（北壁では葺石の基部が確認できた。）

C-1区西壁

- 1層………表土、黒褐色土層。
- 2層………暗褐色土層（ややバサバサしている）。
- 3層………暗赤褐色粘質土層。
- 4層………赤褐色粘質土層（3・5層に比べて粘性がある）。
- 5層………暗赤褐色粘質土層。

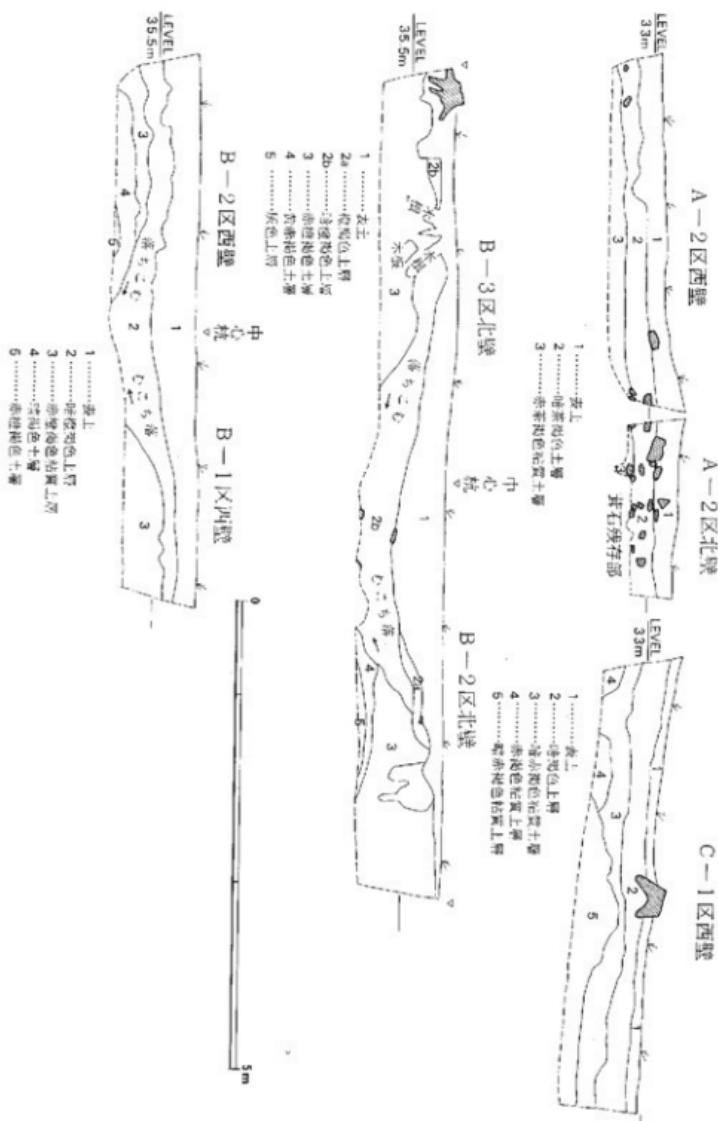
B-2、3区北壁

- 1層………表土、暗褐色土層。
- 2a層………橙褐色土層（やや粘性あり）。
- 2b層………暗橙褐色土層（あまり粘性はない）。
- 3層………赤橙褐色土層（やや粘性あり）。
- 4層………黄赤褐色土層（小指の先大～小児の拳大の安山岩風化礫を含む。充填土の粘性はなくバサバサしている）。
- 5層………灰色土層（粘性はなく、バサバサしている）。

B-1、2区西壁

- 1層………表土、暗褐色土層。
- 2層………暗橙褐色土層（あまり粘性はない。B-2、3区北壁の2b層と同一層）。
- 3層………赤橙褐色粘質土層。
- 4層………暗褐色土層（バサバサしている）。
- 5層………赤橙褐色土層（少し粘性がある）。

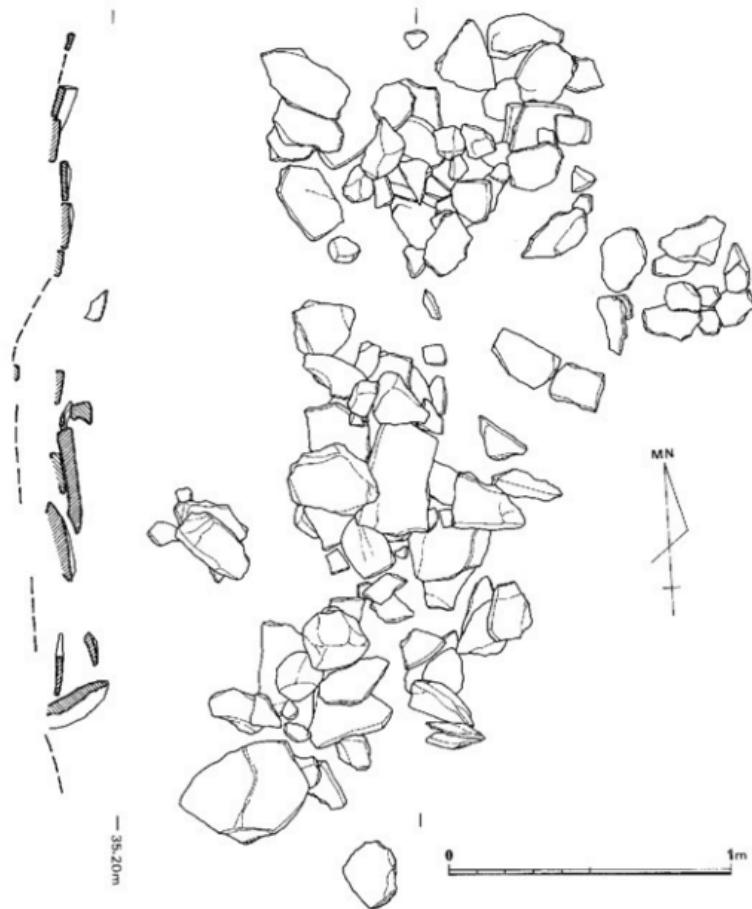
まず、内部主体の確認であるが、B-2、3区北壁、B-1、2区西壁の土層をみてもわかるように、2層と2a、2b層が、3層を切り込んで、やや落ち込む状況がうかがわれる所以、堅穴式系の内部主体が考えられる。石棺であったか石室であったかはわからない。周濠は、A-2区、C-1区でも確認できなかったが、葺石を確認し、その基部をA-2区で確認できた。



第6図 土層実測図

(4) 埋葬主体部

後円部の中央に6m×9mの範囲で、埋葬主体部の確認のための掘り下げを行った。現地表面から30cmほどのところから、攪乱された土層に混じって、わずかずつであるが、板石が出土はじめた。しかし、これらは、多分に原形・原状をとどめたものではないと判断されたため、さらに掘り下げを進めたところ、地表下70cmほどのところから、割りとまとまった状態での板石



第7図 埋葬主体部実測図

の出土を見た。最初は、これらの板石が古墳墳丘の主軸方向に向いたような状況で、ほぼ上面の高さを捕えたような形で検出されたため、当古墳の埋葬主体部ではないかと考えた。それに、この上部の埴瓦表面は、わずかではあるが、くぼんだような状況であったため、石室あるいは石棺が埋没した状態も考えられた。ここでの掘り下げは一応この段階までで止め、あぜを残して反対側の掘り下げにかかった。ここでも、地表面下70cmほどの場所から板石が検出されはじめた。そして、この板石に至るまでの埋め土は、やや黒味がかったて柔らかだった。

埋葬主体部の構築材と考えられる板石の広がる範囲は、ほぼ南北方向に長く、3.1m、幅は北側で広く約2mあり、整然とした状況とは言いがたく、散乱していた。また、この範囲のなかでも、板石が重なって集中する部分、まばらな部分が認められ、埋葬施設の床面とは考えられない。この重なっている部分の厚さは30cm程度である。石材の大きさは一定ではなく、大小の石があるが、特に大型のものではなく、最も大きなもので45cm×30cmほどである。そして、この板石の間に、指先大の丸い浜石が検出されている。床面に敷いていたものであろうか。

以上の状況から、発掘の記憶を残さない、かなり古い時期に、何回かの盗掘を受けたものではないか、と推測される。その結果として、主体部の石材がこのように、ひどく散乱したものと考えるのである。また、石室とすればその蓋石、石棺であったとしてもそれに見あう大きさの石材が残っていない。これも数度の盗掘の結果であろうか。

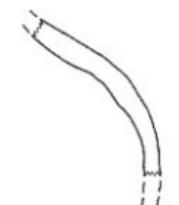
(5) 出土遺物

後円部の北東裾の部分、Aトレンチの南端表土中から土器が出土した。同一固体と考えられる破片であるが、数十片に碎けているため原形に復し得ない。最も大きな破片で10cm×7cmほどであるが、それから瘦うと壺の肩部付近と考えられる。その部分の復原した直径は約36cmになるが、口縁部と底部が全く認められないため、形状はもちろん、器高も明らかではない。

小さな石英粒を含んでいるが、良質の胎土で、表面にはヘラ様のものでの横方向へのミガキ痕が残り、暗赤色の丹を塗っている。内面の作りはやや雑で、指先でと思われる押えの痕跡が付いている。淡い黄灰色を呈し、焼成は普通であるが、やや虚くなっている。古墳への供獻品であろうか。

後円部墳頂の、埋葬主体部と考えられる板石の集中部分の南端付近からも、土器片一点のみが検出された。6cm×3cmほどの小破片で、これも形状・法量とともに明確ではない。

外外面ともに赤褐色を呈し、胎土・焼成は良い。外面にはハケ目の調整痕が残り、内面もハケで調整したあとをナデたような痕跡が認められる。古墳との関係は、正確にはなしがたい。



第8図 出土土器実測図

IV　まとめ

今回の笠松天神社古墳の調査では、

- 本古墳の規模・構築法・埋葬施設のあり方
- 遺物と副葬のされ方・遺物から見た構築の時代

などの確認を主な目的とした。そして、その結果

- (1) 本古墳は、主軸を南東から北西に向ける前方後円墳で、最少の場合を想定しても全長34m以上、後円部の直径22m、高さは2.5m、前方部の幅14m、高さ約1.4mあり、「くびれ」部での幅は9.6mである。墳丘斜面には拳大から人頭大の礫石を葺いている。埴輪・周濠は認められない。
- (2) 埋葬施設として、後円部のほぼ中央にその痕跡の一部と考えられる小形の板石が散乱していて、堅穴式石室か石棺であった可能性を窺わせる。また、板石の間に小さな浜石が混じっていることから、最低、一度以上の、床面に達するような盜掘を受けたものと考えられる。
- (3) 遺物は、数十片に割れた土器片のみで、本古墳に直接関係するものとは断定しがたいが、推測される形状は蓋であり、あるいは埴輪的に供獻されていたものであろうか。これが、本古墳に結び付くことが確実ならば、墳丘の形とあわせて、時代的にもかなり遡るものと考えられる。

破壊を受けたと考えられる埋葬主体部と、確定的な遺物が残っていないことから、本古墳の築造の時期等については断言できない。しかし、この古墳は、本町内の岳崎古墳とともに、北松浦地方でも稀少な存在であり、弥生時代の里田原遺跡との関係、歴史的継続という問題など、その存在することの持つ意味も大きいと考えられる。

さらに、前方後円墳としての、墳丘の形が襲っており、教材としての価値も高いと考えられる。また、里田原遺跡に近く、支石墓・田平町立歴史民俗資料館などとも合わせての見学が容易である、という点からも大いに活用されることを期待して、まとめとしたい。

長崎県の古墳については、その在り方を主に、大坪おおざっぱではあるが付録として後述している。現時点で知られている、長崎県の古墳の状況の一部である。

最後になりましたが、地元や笠松天神社の氏子の皆様方の、今回の発掘調査に対して快く御理解と御協力をいただきましたこと、さらに、保存に対しての御熱意に対して、心から感謝申し上げます。

—付— 長崎県の古墳

長崎県は他の県に比べ、いわゆる高塚式の古墳の数が非常に少ない県である。⁴¹

この現象が、どのようなことの表れかを推測することはある程度可能ではある。

まず、本県の地勢について概観すると、一言でいうなれば、いわゆる『魏志倭人伝』の「一海を渡る千余里、対馬に至る」「山陥しく深林多し」「良田無く、海物を食して自活し、船に乗って南北に市縦する」の部分の如くで、さらに対馬より平地が多い壱岐国においても「水山は在るが食べるには足らず、ここでもまた南北に市縦する」といった状況であり、この傾向は五島列島、さらに本土部においても、一部を除いては例外とは言えない。

現在の、県別における総面積に対しての耕地面積の割合を見てみると、長崎県は少なく、それ以上に水田部の占める割合が、福岡県の17%、佐賀県の21%にくらべ長崎県は7%と、北部九州の各県でみて、 $1/2$ から $1/3$ と、格段の違いを示している。このようなことが、全般的に古墳の数の少ない原因の最大のものではないだろうか。

例外としては、対馬の雞知周辺・壱岐の深江田原・東彼杵町の彼杵川流域・大村市の郡川流域・有明海をはさんだ多良岳南麓と雲仙北麓などの平地に、古墳の存在が多く知られている。これらの地域は、割りあいに平地が多く、水も得やすく、農業生産に適した場所ではある。しかし、この他にも、周辺に平坦地を持たず、海を生活の重要な部分としていたと考えられる、長崎市の曲崎古墳群・南串山町の国崎遺跡などの存在も知られている。

対馬・壱岐に分布が多いが、特に対馬はその東海岸、浅茅湾に近い雞知周辺に、また、壱岐の場合はほぼ全島に分布するが、一般的な傾向としては同島中央部付近に集中している。これはいずれも畿内政権との結び付きの方からも説明されている事象である。すなわち雞知には対馬最初の前方後円墳の出現が知られ、朝鮮半島、北部九州と畿内を結ぶ要衝であるこの地に、中央の出先機関とも思えるものの存在を示すものであり、壱岐の場合には、国分寺等もあり、政治的中心である地域に濃く分布しているのであろう。それにしても長崎県内の約420箇所の古墳のうち、260余箇所と、60%強の古墳が壱岐に集中しているという事態については、この壱岐島の面積が全県での約3.4%の面積しかないということから考えても、いささか異常なことを考へざるを得ない。壱岐の耕地面積は島の約26%、そのうち田は16%で、かなり水田率の高いのは事実であり、同じく対馬の場合の耕地面積が1.7%強、そのうち水田は1%をわずかに超すにすぎないのに比べると、その差は歴然たるものがある。それにしても古墳の数が多いのは、後世における破壊をさほど受けなかったこと・石室構築材としての石材の豊富さなど、複数の要因が考えられるが、ここではそういう事実のみ、問題の提起のみにとどめておきたい。

長崎県の前方後円墳

長崎県では、前方後円墳はどのような在り方を示しているか、全県的な分布の状況と、近接



第9図 長崎県の前方後円墳

する北部九州西側部分における分布の状況を、第9図に表してみた。しかし、佐賀県・福岡県での分布の状況は、図に示した以上に濃厚で、ここには割に著名な前方後円墳のみをあげている。これに対して長崎県内では、現時点までに確定なものとしては24例が知られているに過ぎない。そして、これらのうちでも偏りが極端に近い状況で認められる。壱岐に全県での半分以上、13箇所が集中しているのは、古墳全体の分布の状況と比較してもおかしくはない。対馬では、畿内政権との関係の面から指摘されることの多い、雞知方面に4箇所あり、本土部では7例しか知られていない。平戸・五島列島・西彼杵半島・野母半島には全く知られておらず、島原半島にも北部に一例が残るのみである。

以上のような状況のなかで、一種の空白地帯とも呼べるような北松浦地方での前方後円墳の存在については、大きなものがあるようと考えられる。

第2表 長崎県の前方後円墳

名 称		所 在 地
1	根 曽 一 号 墓	下県郡美津島町
2	根 曽 二 号 墓	下県郡美津島町
3	根 曽 四 号 墓	下県郡美津島町
4	出 居 塚 古 墓	下県郡美津島町
5	百合 烟古墳群 1号墳	壱岐郡勝本町
6	百合 烟古墳群 3号墳	壱岐郡勝本町
7	百合 烟古墳群 14号墳	壱岐郡勝本町
8	百合 烟古墳群 15号墳	壱岐郡勝本町
9	百合 烟古墳群 20号墳	壱岐郡勝本町
10	対 馬 塚 古 墓	壱岐郡勝本町
11	双 六 古 墓	壱岐郡勝本町
12	妙 泉 寺 1 号 墓	壱岐郡芦辺町
13	山 ノ 神 1 号 墓	壱岐郡芦辺町
14	観 上 山 1 号 墓	壱岐郡芦辺町
15	観 上 山 2 号 墓	壱岐郡芦辺町
16	大 原 天 神 の 森 1 号 墓	壱岐郡郷ノ浦町
17	大 原 天 神 の 森 2 号 墓	壱岐郡郷ノ浦町
18	岳 崎 古 墓	北松浦郡田平町
19	笠 松 天 神 社 古 墓	北松浦郡田平町
20	ワ レ 榆 現 塚 古 墓	東彼杵郡東彼杵町
21	ひ き ご 塚 古 墓	東彼杵郡東彼杵町
22	石 走 古 墳 群 1 号 墓	大 村 市
23	茶 屋 の 辻 古 墓	大 村 市
24	守 山 大 塚 古 墓	南高来郡吾妻町

(古墳名は遺跡台帳による)

佐賀県

名 称		所 在 地
1	小 島 古 墓	伊万里市山代町久原
2	壹 路 史 古 墓	伊万里市二里町川東
3	島 田 塚 古 墓	唐津市大字鏡
4	谷 口 古 墓	東松浦郡浜玉町
5	船 塚 古 墓	佐賀郡大和町久留間
6	銚 子 塚 古 墓	佐賀市金立町金立

福岡県

名 称		所 在 地
1	銚 子 塚 古 墓	糸島郡二丈町田中
2	丸 殿 山 古 墓	福岡市西区周船寺
3	若 八 輜 宮 古 墓	福岡市西区徳永
4	今 宿 大 塚 古 墓	福岡市西区今宿
5	蜀 崎 古 墓	福岡市西区今宿青木

墳丘の規模はさほどでもないが、里田原遺跡という弥生時代からの遺跡で実力を培ってきたと思われる豪族が、地方支配のため前方後円墳という、形として畿内政権と結び付きを持ったことを表わすものと考えられ、畿内政権の影響が、本州最西端というべきこの地方まで及んだことを示すものと考えられるからである。また、正式な調査はあっていないが、もう一つの岳崎古墳は、壱岐水道に臨んだ台地上に位置している。この古墳は、周辺にその農業生産の基盤となるような平坦地を持っていない。このような状況からは、端的に言うならば、対馬難知の前方後円墳群と同様の、西日本あるいは畿内と半島を結ぶ海上交易、あるいは海を直接・間接に生活の舞台としていた人物の墓地、と考えるのが自然であるといえるかも知れない。

今後、北松浦地方でも、特に松浦市を通る海岸部での、北部九州との交流を示す前方後円墳の存在が知られるようになることを期待したい。

田平町の古墳

高塚式の古墳が少ない本県においても、北松浦地方の本土部には特に少ない。田平町内には、古墳時代の遺跡としてはわずかに4箇所しか知られていない。このうち、里田原遺跡は、平地の南東部から古墳時代の遺物が出土したことなどによっている。弥生時代から続く人々の生活の跡と考えられる。中野ノ辻遺跡は、里田原遺跡南側2kmほどの所に位置する墳墓群である。笠田川を跨った場所にある小盆地南端部の丘陵上に立地しており、その北側にある30ヘクタールほどの平地に臨んでいる。昭和55(1980)年の秋の第一次調査と、56(1981)年5月から6月にかけての第二次調査がなされた。この結果、14基の箱式石棺が検出された。しかし、ほとんどは「弥生時代に属する可能性が高く」、ただ1基のみについて「弥生から古墳期に到る過渡的な位置にあるのかも知れない」とされている。^{註1)}町内には、これ以外の古墳時代の遺跡としては、今回調査した笠松天神社古墳と岳崎古墳があるのみである。そして、前方後円墳に続く高塚式古墳が、現時点では全く認められていない。高塚を持たない、弥生時代からの地方的な伝統としての箱式石棺墓群が、まだ知られないまま存在する可能性も考えられる。いずれにしても、当方における古墳時代社会の成長の程度が、多くの群集墳を造り、残した地方と異なっていたことによるものと考えられる。

- 註1) 『長崎県遺跡地図』長崎県教育委員会 1987年
2) 『長崎県統計年鑑』『長崎県民手帳』長崎県 1988年 他
3) 『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会 1977年
4) 南串山町教育委員会で昭和63年度調査 1989年に報告書刊行予定
5) 註2等による
6) 『里田原遺跡』田平町教育委員会 1985年 他
7) 『中野ノ辻遺跡 里田原遺跡』田平町教育委員会 1982年

図 版



北東から(昭和59年5月撮影)



北西から(昭和50年撮影)

笠松天神社古墳遠景



北西から(昭和50年撮影)



南東から(昭和63年撮影)

笠松天神社古墳近景



後円部の調査



前方部の調査

調査風景

図版 4



伐採作業



後円部での
調査風景

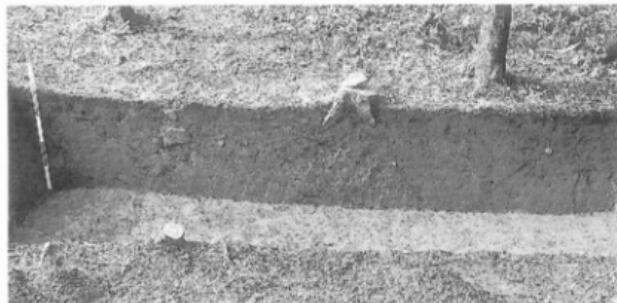


「くびれ」部
での調査

調査風景



上・左
後円部中央
の土層



左
A-1

墳丘の状況（土層）



後円部の土層



土層と埋葬主体部上面

墳丘の状況



上
くびれ部の
葺石の状況



右
同上

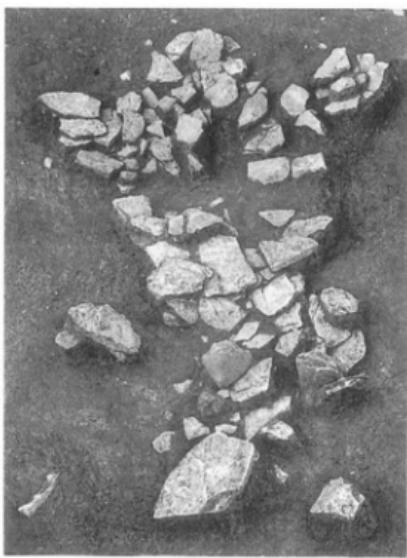


右
後円部の
葺石の状況

墳丘の状況



西から



南から

埋葬主体部の状況

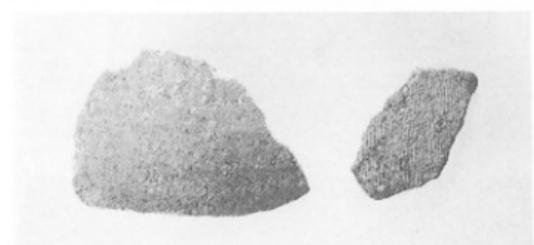
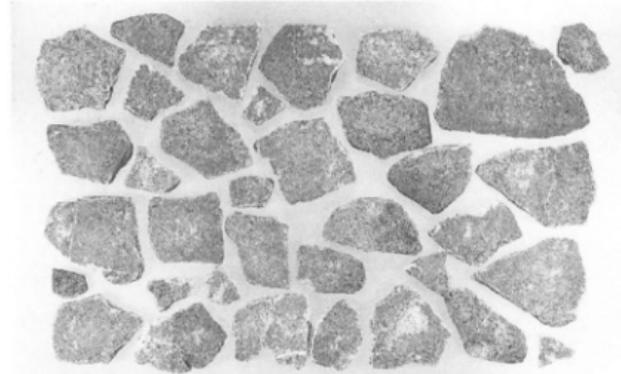


後円部の葺石端部



後円部の埋葬主体

墳丘と埋葬施設



調査終了後の墳丘

出土遺物

田平町文化財調査報告書第4集

笠松天神社古墳

昭和63年3月

発行 長崎県田平町教育委員会
長崎県北松浦郡田平町山内免

印刷 川口印刷株式会社
〒851-01 長崎市田中町1020-7